

学生の捉える「相互行為」からみる情報収集の特徴と今後の課題

—非言語的コミュニケーションにおける気づきの分析—

原華代, 中川名帆子, 大儀律子, 新井龍, 臼井千津, 坂口桃子

常葉大学健康科学部研究報告集 第7巻第1号 抜刷  
常葉大学健康科学部

2020（令和2）年3月

Research Reports of Faculty of Health Science Vol.7 No.1  
Faculty of Health Science, Tokoha University

< 研究ノート >

## 学生の捉える「相互行為」からみる情報収集の特徴と今後の課題 —非言語的コミュニケーションにおける気づきの分析—

### Characteristics of the "Interaction" report which the Student Described and Future Issues - Analysis of the Point Where a Student Noticed on the Non-Verbal Communication -

原華代<sup>1</sup>, 中川名帆子<sup>1</sup>, 大儀律子<sup>1</sup>, 新井龍<sup>1</sup>, 臼井千津<sup>1</sup>, 坂口桃子<sup>2</sup>

Hanayo HARA, Nahoko NAKAGAWA, Ritsuko OGI, Ryu ARAI, Chizu USUI, Momoko SAKAGUCHI

1 常葉大学健康科学部看護学科

Department of Nursing, Faculty of Health Science, Tokoha University

2 滋賀医科大学医学部麻酔学講座

Shiga University of Medical Science Department of Anesthesiology

#### 【要旨】

【目的】『基礎看護学実習Ⅱ』終了後に学生が提出した課題レポート「実習で体験した看護場面における自己と患者との相互作用」の記述内容から、学生の非言語的コミュニケーションにおける気づきの特徴を見出すことを目的とした。【方法】匿名の課題レポートから、看護場面を記述する文脈を1文（句点まで）1記録単位とし、1記録単位の意味するものを分析した。抽出後の分類は、茂野らの文献を参考に「メッセージの表現装置としてのさまざまなコミュニケーション手段」で示される言語的・非言語的要素14項目に分類し集計した。【結果】学生84名に協力依頼し、同意の得られた54名（64.3%）のレポートを分析した。その結果、言語的要素155件、非言語的要素118件、総数271件の気づきの記述が抽出された。【考察】非言語的要素の記述件数の上位5位は「表情」、「姿勢」、「視線行動」、「沈黙」・「ジェスチャー」、「間」であった。学生自身が送っている非言語的要素の記述は、273件中20件（7.3%）であった。看護コミュニケーション技術は、日常的なコミュニケーションとは異なり、必ず対面で「知覚する」という事実を特徴としていることを踏まえ、学生の気づきの涵養を図ることが重要であることが示唆された。

Key Words : 相互行為, 非言語的コミュニケーション, 看護学実習

interaction, non-verbal communication, nursing clinical practicum

#### 1. はじめに

看護とは何か、が探求され始めた1850年代から、看護の基盤は対人的援助活動であることを多くの看護理論家は提唱している。Joyce Travelbee<sup>1</sup> (1926-1946) は、看護は人間対人間の関係を通じて達成されると考え、看護におけるコミュニケーションは、単に対象者と言葉のやり取りをすることだけを意味

するのではなく、対象者と対面し互いの関係を通じて、送り手と受け手が相互に役割を変えながら双方向の相互作用を行う中で展開されると指摘した。(J. Travelbee 2010, 173-175)

看護学教育においてコミュニケーション技術は重要な能力として位置付けられている。2009年の第4次カリキュラム改正では、看護

基礎教育におけるコミュニケーション教育の重要性とその強化が明示された<sup>23)</sup>。その背景要因として、現代の学生のコミュニケーション能力の低下があげられている。

現代の青年期の学生は、核家族化、インターネットや携帯電話などの普及に伴い、日常生活における対面でのコミュニケーションの機会も減少している。文部科学省<sup>4)</sup>では「子どもが大人とかかわる機会は、本来家庭や地域において自然に恵まれるものであるが、今日、学校教育がそのきっかけづくりをすることが求められている」と指摘し、人間力の育成を推進している。日本における三世帯世帯の割合とスマートフォン普及率<sup>24)</sup> (図1)からも日常生活における対面でのコミュニケーション能力の乏しい学生が、看護場面におけるコミュニケーション能力を習得することは容易ではないことが推察される。看護基礎教育におけるコミュニケーションの学習は、講義や演習の中で展開されているが、限られた時間内だけで習得することは困難である。そのため学生が実習での体験型の学習機会に、どのようなコミュニケーションの視点を有し体験していたかを知ることは、看護コミュニケーション技術の教授方法の開発につながり、看護学教育における重要な課題である。

先行研究を概観すると、看護学実習でのコミュニケーションに関する文献は多く研究されている。杉本ら(2015)の研究<sup>7)</sup>では、『基礎看護学実習Ⅰ』の実習記録の内容分析から、実習で学生が学んだことは「看護の役割」「非言語的コミュニケーションの困難さと重要性」などの7つのカテゴリーであったことを明らかにしている。荒木ら(2010)の研究<sup>8)</sup>では、学生への半構成的面接調査方法により、実習での継続受持ち事例の振り返りから、学生によるどのような関わりが患者の支えになったかを分析し、「共感し受け止める」「常にいる」などが明らかになった。また、岩脇ら(2007)の研究<sup>9)</sup>では、看護学生の3

年間のコミュニケーション技術の場面において、コミュニケーションが成立した要因に関する記述を質的に分析した結果、1年次は「話題」、2年次は「患者の状態」、3年次は「話し方」の件数が多く、「3年次になると、患者との関係性に着眼し、いかに患者の思いを表出させ、そのことに看護者としてどのように対峙していくかに変化していた」と示している。

このように先行研究では、学生が言語的・非言語的コミュニケーションが重要であると気付いていることは明らかにされており、コミュニケーションが成立したと考えた記述内容はどのようなものか、記録物の中にどの程度記述されていたか、に関しては多く報告されている。他方、学生側が非言語的コミュニケーションの送り手であること、そして非言語的要素のどの点に着眼しているかについては、ほとんど明らかにされていない。伝達活動における非言語的要素の占める割合は65~70%<sup>10)</sup>と言われており、学生の非言語的要素である視線行動、身体の向き、表情、ジェスチャー、パーソナルスペース、等に関して学生自身がどの点に着眼しているかを明らかにする必要があると考えた。

## 2. 研究目的

『基礎看護学実習Ⅱ』終了後に学生が提出した課題レポート「実習で体験した看護場面における自己と患者との相互作用」の記述内容から、学生の非言語的コミュニケーションにおける気づきの特徴を見出すことを目的とした。

### 2.1 用語の定義

相互行為<sup>11)</sup>とは、人間と人間のあいだの知覚とコミュニケーションのプロセスである。また、目標を目指す言語的もしくは非言語的行動で示され、直接に観察できる行動である。

相互作用<sup>19)</sup>とは、なんらかの接触であり、そのなかで2人の個人が相互に影響を及ぼし合い、言語的ないし非言語的にコミュニケーションを行う、と定義されている。

これを踏まえ、本研究において「相互行為」とは、二人の個人が相互に影響を及ぼし合い、知覚し、言語的・非言語的コミュニケーションをおこなうことと定義する。なお、本稿において「相互作用」「相互行為」は同義語として用いた。

## 2.2 実習の概要

『基礎看護学実習Ⅱ』の目標は①受け持ち患者の入院生活と患者を取り巻く望ましい環境について理解できる、②受け持ち患者の看護上の問題に対して、「看護過程」を用いて解決する方法の基本を理解することができる、③指導者の指導の下で、既習の基礎看護技術を受け持ち患者に適切に実践することができる、④患者を中心とした医療チームの連携の必要性を理解し、チームにおける看護の機能と役割について述べるすることができる、⑤看護を学ぶ学生として自ら課題を持ち、志向する看護専門職としての望ましい態度の涵養を図

ることができる、の5つである。

学生のレディネスは、2学年後期にあり、基礎看護学領域に位置づけられた全ての学内履修科目の修了後に履修することができる最後の科目である。実習方法は、臨地実習に赴き1名の患者を受け持ち、看護過程を用いて看護の基本を学ぶ。

## 3. 研究方法

### 3.1 研究デザイン：質的記述的研究

### 3.2 データ収集期間

データ収集期間は2019年6月～7月であった。

### 3.3 研究対象者および研究データ

Y年度『基礎看護学実習Ⅱ』履修学生を研究対象者とした。当該実習終了後に提出した課題レポート「実習で体験した看護場面における自己と患者との相互作用」を匿名のデータとし分析することに同意の得られた学生のレポートをデータベースとした。データは茂野ら<sup>20)</sup>が示す「メッセージの表現装置として

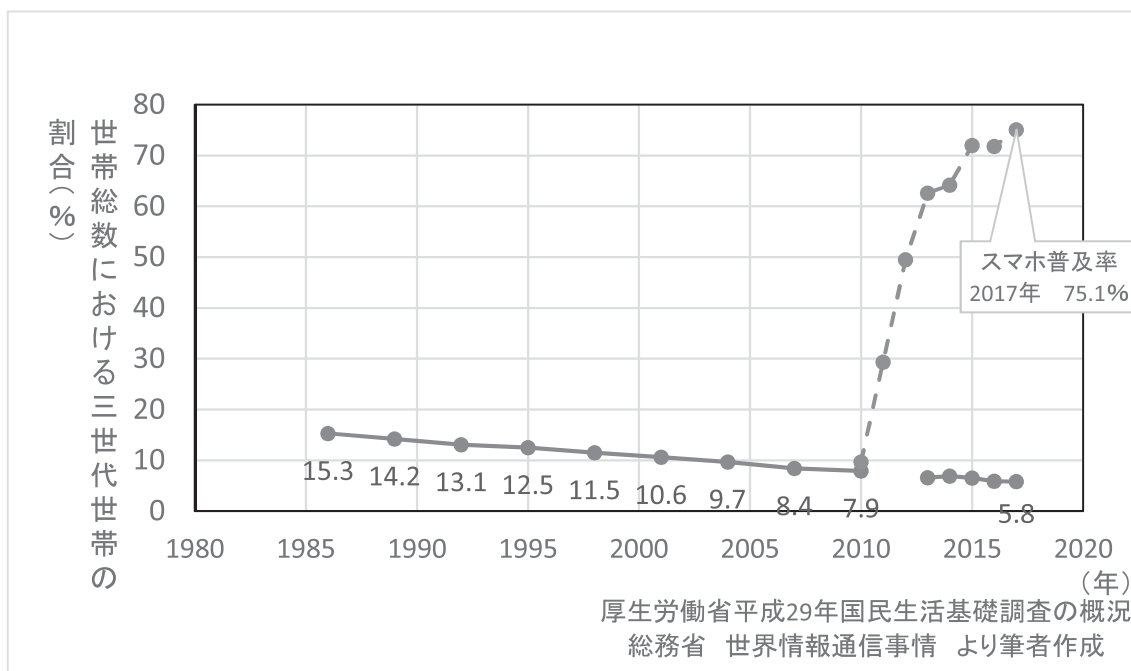


図1 三世代世帯の年次推移とスマートフォン普及率の推移

のさまざまなコミュニケーション手段」を参考に14の項目に分類した。以下に14の項目を示す。

①音声言語, ②文字言語, ③声の大きさ, ④声の調子, ⑤声の速さ, ⑥イントネーション・方言, ⑦外見, ⑧身体動作, ⑨生理的变化, ⑩感覚へのはたらきかけ, ⑪発声, ⑫間・沈黙, ⑬接触・タッチング, ⑭テリトリー・パーソナルスペース

### 3.4 データ収集の手順

Y年度『基礎看護学実習Ⅱ』を修了した学生84名に研究協力を依頼した。研究対象者への研究目的・方法について口頭と書面による説明を行った。

### 3.5 本研究の信頼性

質的記述的研究の経験のある共同研究者により各々に分析し、結果を持ち寄り、解釈や分類に偏りが無いのか、共同研究者間で繰り返し検討し一致点を見出すことで信頼性を確保した。

### 3.6 倫理的配慮

対象学生に対し研究の目的、研究の方法、調査の概要、協力の有無は自由意思によるものであり、同意をしない場合も不利益はなく、今後の成績にも一切関係ないことを文書と口頭で説明した。データとなる「課題レポート」は、氏名・学籍番号を削除して使用し、本研究目的以外に使用しないこと、「課題レポート」から目的に合致するフレーズのみ選択使用することを説明した。収集したデータは研究室の鍵のかかる棚に保管し、分析後5年間厳重に保管の上、シュレッダーにより粉砕することを説明した。課題レポートと研究同意書の提出には、学生の意思決定に影響を与えないよう研究者不在の場所に提出ボックスを設けた。同意撤回はデータの集計段階に移る前日まで受け付けることを説明し、同意撤回

者の匿名性を確保するため、成績評価とは関係のない共同研究者へ申し出てもらい、匿名性を確保しながら当該レポートを取り除く手順を説明した。なお、以上の倫理的配慮は常葉大学倫理審査委員会の承認を得た。(2019年6月27日研静19-3)

## 4. 分析方法

### 4.1 学生の捉えた「相互行為」場面から「気づき」の記述を抽出する

まず、「相互行為」がレポート内のどの部分に記述されているかを判断するために、看護場面の記述に着目した。学生のレポートは多様性に富んでいるため、「Berelson, B.の方法論を参考にした看護学教育における内容分析」<sup>10)14)</sup>に基づき、データの多様性に惑わされず一貫性を維持するために、「学生は、基礎看護学実習Ⅱにおいて、何を“体験した看護場面”と捉えているか」との問いと、問いに対する回答文は「学生は、実習中( )という看護場面に直面している」と設定した。この工程により、レポートの記述全体から、看護場面における「相互行為」の記述に絞り込んだ。

### 4.2 看護場面における言語的要素の記述の抽出

看護場면을記述する文脈を1文(句点まで)1記録単位とした。鍵括弧で記述されている文脈のみを「言語的要素・音声言語」とした。筆談、手紙などの文字言語でのコミュニケーション場面の記述は「言語的要素・文字言語」として抽出した。

### 4.3 看護場面における非言語的要素の記述の抽出

非言語的要素の記述の抽出をするために、1文1記録単位とした文脈の意味するものを分析した。抽出の分類は、「メッセージの表

現装置としてのさまざまなコミュニケーション手段」にあげられている言語的・非言語的要素の用語とその内容を示す言葉とした。

分類作業のマニュアルとして2点留意した。1点目は、1文の中に複数の非言語的要素或いは複数の意味内容が記述されている場合は、文頭の主語との一貫性に注目し抽出することで統一した。2点目は、【10. 感覚へのはたらきかけ】と【13. 接触・タッチング】の2箇所に「接触」の項目があるため、看護技術実施時の接触を【10. 感覚へのはたらきかけ】へ、コミュニケーション場面での接触を【13. 接触・タッチング】へ分類することで統一した。

#### 4.4 言語的・非言語的要素の記述数の集計

言語的・非言語的要素の記述数を単純集計し検討した。

### 5. 結果

Y年度『基礎看護学実習Ⅱ』を実施した学生84名中、同意の得られた54名（64.3%）のレポートを分析した。その結果、表1に示す

ように言語的・非言語的要素は273件であった。

#### 5.1 学生が記述した言語的要素

総数273件の内、学生が取り上げた言語的要素の記述は155件（56.8%）であった。【1. 音声言語】は149件と最も多く、【2. 文字言語】による言語的要素の表現は1件であった。準言語的要素とは、音声言語と同時に発せられる声の大きさや調子のことをいう。準言語的要素に関する記述は、【3. 声の大きさ】3件、学生が使い慣れない敬語を使おうとして不自然な言い方になった、などの【4. 声の調子】に着目したものは2件であった。

【5. 言葉の速さ】【6. イントネーション・方言】についての記述は0件であった。

#### 5.2 学生が記述した非言語的要素

総数273件の内、学生が取り上げた非言語的要素の記述は118件（43.2%）であった。

【8. 身体動作】【10. 感覚へのはたらきかけ】【12. 間・沈黙】は多くの記述があったが、【7. 外見】【9. 生理的变化】【11. 発声】【13. 接触・タッチング】【14. テリト

表1 学生の記述した言語的要素・非言語的要素 (n=273)

		記述数 n=273		内訳		
言語的要素	準言語的要素	1.音声言語	149	149		
		2.文字言語	1	1		
		3.声の大きさ	3	3	学生が送り手となっている非言語的要素の記述件数	
		4.声の調子	2	2		
		5.声の速さ	0	0		
		6.イントネーション・方言	0	0		
	155	155				
非言語的要素	身体言語	7.外見	2	服装	1	0
				装飾品	1	1
		8.身体動作	62	視線行動	9	5
				表情	37	2
				姿勢	10	2
				ジェスチャー	6	3
		9.生理的变化	2	赤面する	0	0
				涙を流す	2	1
		10.感覚へのはたらきかけ	32	看護技術実施による接触	28	0
				温感へのはたらきかけ	4	1
	音声行動	11.発声(あいづち、うめき声、笑い声など)	2	あいづち	1	0
				うめき声	1	0
		12.間・沈黙	11	間	5	0
				沈黙	6	0
接触	13.接触・タッチング	3	接触・タッチング	3	2	
空間	14.テリトリー・パーソナルスペース	4	パーソナルスペース	4	3	
		118		118	20	
言語的・非言語的要素の記述総数		273			20	



リー・パーソナルスペース】の記述はそれぞれ10件未満であった。

【7. 外見】では、「(A氏は)いつも履かない靴下を履いている」に表わされるように服装や装飾品に関する記述が2件であった。

【8. 身体動作】では、「こちらを見てうなずいてくれた」に表わされるように視線行動に関する記述、「患者さんの表情がすごく和らいでいて、楽しそうに見えた」に表わされるように表情に関する記述、「A氏が左下腹部をおさえて顔をしかめた」に表わされるようにジェスチャーに関する記述を含む62件が抽出された。

【9. 生理的変化】では、「(A氏は)会話中に涙を流すことや歩行で愉快的表情を見せるなど日内変動が激しかった」に表わされるように、赤面することや涙についての気づきの記述が2件であった。

【10. 感覚へのはたらきかけ】では、「自分では手を温めたつもりであったが、患者さんには不快感を与えてしまった」に表わされるように、温感・冷感へのはたらきかけに関する記述4件、「皮膚が乾燥している高齢者にどれくらいの圧力をかけて拭いていいかわからなかった」などの看護技術実施時の接触の記述28件を含む、32件が抽出された。

【11. 発声】では、「(A氏は)時々うめき声をあげることがある」などの発声や相槌に関する記述が2件であった。

【12. 間・沈黙】では、「意識していないと無言になってしまう」「一言二言で終わってしまった」などの、会話の中での間や沈黙に関する記述11件が抽出された。

【13. 接触・タッチング】では、「手を握ってほしいと要望を受けずっと手を握っていた」に表わされるようにコミュニケーションとしての接触3件が抽出された。

【14. テリトリー・パーソナルスペース】では、「(A氏はトイレに)鍵をかけることはしていなかったが、私が中に入るべきか迷い、

途中声をかける形になった」に表わされるように、対象者のパーソナルスペースに関する記述は4件であった。

非言語的要素の記述118件は、そのほとんどが双方向の相互作用の記述であるが、学生側が送り手となっているものに注目すると20件であった。「手を握ることで了承してもらいやすくなることを学んだ」「(私は)患者の顔を見ることはなかった」「私は患者の前であたふたし、ぎこちない態度をとってしまった」などと表現されていた。

## 6. 考察

### 6.1 学生の気づきの特徴（言語的要素）

学生が取り上げた言語的要素は、音声言語149件、文字言語1件、準言語的要素5件であり、音声言語の記述が最も多かった。この結果から学生は会話中の「音声言語」をコミュニケーション手段として気づいている、記録することができているといえる。一方、対象者の声の大きさや声の調子、速さなどの準言語的要素にはほとんど気づいていない、記録できていないといえる。言語的要素は言葉そのものだけでなく、対象者の声の大きさが普段と違う、急に口調が強くなった、焦るような話し方をした、などの準言語的要素からも対象者の身体・心理・社会的情報を得ることができる。今後、準言語的要素についての気づきを支える教授活動の必要性が明らかになった。

### 6.2.1 学生の気づきの特徴（非言語的要素）

量的に概観すると、学生が取り上げた非言語的要素は言語的要素より少ない傾向があるが、言語的要素155件、非言語的要素118件という結果から、言語的要素だけに目を向けているのではないことがいえる。『基礎看護学実習Ⅱ』では、学生は担当患者に対して日常生活援助を実施する。したがって「看護技術

実施による接触」の記述件数が多いという結果は明白である。そのため「看護技術実施による接触」以外の小項目に着目したところ、記述件数の上位5位は「表情」、「姿勢」、「視線行動」、「沈黙」・「ジェスチャー」、「間」であった。

人と人のコミュニケーションにおいて、非言語的要素は65～70%を占めるといわれている。つまり私たちは人と対面した時、言葉からの情報は30～35%にすぎず、その人のしぐさ、目の動き、話し方、握手した時の手の温かさなど、言葉以外のメッセージを無意識の中で交換している。しかしながら現代社会における人と人のコミュニケーションは、対面場面とは限らない。私たちは便利な情報社会に慣れ親しみ、手の平の中にある電子機器により、文字や絵や画像を用いて、人と対面することなく、コミュニケーションを成立させることができている。看護学生のSNS利用状況について調査した小沢ら<sup>19)</sup>は、調査対象の看護学生の92.8%がSNSを利用しており、82.3%がほぼ毎日利用している、利用の目的の第一位は「クラスメイトとの連絡手段」であったことを報告している。また、学生の感情を表す語彙の変化を経年比較し検討した小玉ら<sup>20)</sup>は、感情の機微を表現する語彙を知らない学生が増加傾向であることを報告している。「文字情報だけでは伝えきれない感情や気分を、絵文字・顔文字・スタンプ等で補っており、そのことでトラブルを回避している」と指摘している。

これら先行研究で示されるように、私達の生活に欠かせないものとなったソーシャルメディアを介した文字や絵によるコミュニケーションでは、対象者の「視線行動」「外見」「姿勢」などは直接観察しにくいといえる。現代の学生はソーシャルメディアにおいても馴染みのある「言葉」「表情」「沈黙」「間」には気づくことができ、本研究においても「表情」37件、「沈黙」6件、「間」5件と、非

言語的要素において「表情」が最も多く記述されていると考えられた。

次に、学生自身が送り手となる非言語的要素では、学生自身が自ら送っているメッセージに気づき、記述しているものは273件中20件（7.3%）であった。コミュニケーションの基本的構成要素は、刺激・送り手・メッセージ・伝達経路・受け手で構成されており、送り手と受け手の2者間でおこなわれる<sup>17)</sup>。その表現装置は言語的要素・非言語的要素があり、送り手の意図が受け手へ伝えられる。コミュニケーション場面では、送り手の意図が受け手に伝えられると同時に、言葉を発しなくとも受け手の意図も送り手に伝えられるという現象が同時進行で生じている。そのため臨地実習の場において、学生は対象者が送り出すメッセージだけでなく、自分自身が送り手となっている非言語的要素にも気づくことが大切である。学生が「意識していないと無言になってしまう」「一言二言で終わってしまった」と捉えたのならば、自己の服装・身体の向き・視線行動・間はどのようにメッセージとなり相手に送られていたかに気づき、意識を持つことは看護コミュニケーション技術の習得につながる第一歩になる。今後の教授活動において、学生自身の送り出している非言語的要素が、対象者にはどのように見え、感じられていたかを客観的に観察する教育方法を検討する必要がある。

#### 6.2.2 学生の気づきの特徴（非言語的要素）－看護コミュニケーション技術として－

人間同士のコミュニケーションは、情報処理学、社会学などの領域においても長く研究されている。社会学において相互作用とは、「社会的な場で複数の主体が影響をおよぼし合い、それによって互いの関係を変容させていく過程」と定義されている<sup>18)</sup>。Joyce Travelbee<sup>1)</sup>は、「『看護婦 - 患者の相互作用』という用語も、ひとりの看護婦と、ひとりの



病人とのあいだの何らかの接触を示し、この2人の人間はお互いに相手をきまった様式で知覚するという事実を特徴としている」と示している (J. Travelbee 2010, 175). この2つの定義を比較すると看護における「相互作用」は「知覚する」という事実を特徴としていることがわかる. 看護師は対象者と直接対面し、触れ、知覚することで変化に気づくことができる.

本研究において、【10. 感覚へのはたらきかけ】は4件あり「自分では手を温めたつもりであったが、患者さんには不快感を与えてしまった」と表わされている. 【13. 接触・タッチング】では、「手を握っていてほしいと要望を受けずっと手を握っていた」と表わされている. これら非言語的要素は、対象者と対面し知覚するからこそ得られる情報であり、これらを的確に得る観察は看護師の重要な役割といえる.

また、重症心身障害児（者）とのコミュニケーションに関する先行研究において、岡澤<sup>19)</sup>は、重症心身障害児（者）との相互作用場面において、言語や身体動作からメッセージを発信することが困難な状況にある児（者）と向きあうとき、かかわり手側のあり方が問われる、と示している. かかわり手が児（者）に過剰な緊張をもたらしたり、児（者）の示している微小な変化を見逃してしまう可能性がある<sup>20)</sup>と述べている. 本研究において、学生は自己の行動を「(私は) 患者の顔を見ることはなかった」「私は患者の前であたふたし、ごちない態度をとってしまった」と振り返っている. 看護コミュニケーション技術では、かかわり手側のあり方によって対象者は緊張したり変化するということを理解した上で、今後、学生の看護コミュニケーション技術の向上をはかり、教授活動にいかすことが重要である.

## 7. 結論

『基礎看護学実習Ⅱ』実習終了後に提出された課題レポート「看護場面における自己と患者との相互作用」54事例を分析した結果、以下の結論が得られた.

- 1) 学生の捉える「相互行為」からの気づきは、音声言語149件、文字言語1件、準言語的要素5件、外見2件、身体動作62件、生理的变化2件、感覚へのはたらきかけ32件、発声2件、間・沈黙11件、接触3件、パーソナルスペース4件であり、音声言語が最も多かった.
- 2) 学生の非言語的コミュニケーションにおける気づきの特徴は、学生自身が送り手となっている非言語的要素に、自ら気づいている学生は273件中20件(7.3%)であり少ない傾向が明らかになった.
- 3) 今後の教授活動において、学生自身の送り出している非言語的要素が、対象者にはどのように見え、感じられていたかを客観的に観察する教育方法を検討する必要がある.

## 謝辞

本研究にご協力いただきました学生の皆様に深く感謝いたします. なお、本研究には開示すべき利益相反はありません.

## 引用文献

- 1) Joyce Travelbee 著、長谷川浩、藤枝和子 訳：人間対人間の看護，第1版第46刷，173～175，医学書院，東京，2010
- 2) 高橋照子：看護学原論．改訂第2版，189～191，南江堂，東京，2016
- 3) 厚生労働省：看護基礎教育の充実に関する検討会報告書，  
<https://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/dl/s0420-13.pdf>，平成19年4月16日，アクセス2019年9月16日

- 4) 文部科学省：教育課程部会第36回 人間の育成  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/attach/1396932.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/attach/1396932.htm) アクセス2019年10月28日
- 5) 総務省：平成30年版情報通信白書 情報通信機器の保有状況（世帯）  
<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h30/html/nd252110.html>, アクセス2019年9月16日
- 6) 厚生労働省：平成29年国民生活基礎調査の概況  
<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa17/>, アクセス2019年9月16日
- 7) 杉本幸枝, 山本智恵子, 吉田美穂, 他：学士課程での基礎看護学実習Ⅰにおける社会福祉施設での学習効果. 新見公立大学紀要. 36: 13~19, 2015
- 8) 荒木美幸, 中尾優子, 大石和代：継続受持ち事例の女性にとって「支え」となった学生の関わりについて. 日本助産学会誌, 24-1: 65~73, 2010
- 9) 岩脇陽子, 滝下幸栄, 松岡知子：臨地実習における看護学生のコミュニケーション技術の学年ごとの特徴の変化－3年課程の看護学生を対象として－. 医学教育, 38-5: 309~319, 2007
- 10) 深井喜代子, 前田ひとみ：基礎看護学テキスト. 改訂第2版, 47, 南江堂, 東京, 2015
- 11) 舟島なをみ：看護教育学研究 発見・創造・証明の過程. 第2版第1刷, 10~16, 201~230, 医学書院, 東京, 2010
- 12) 都留伸子, 池田明子, 稲田八重子, 他：看護理論家とその業績. 第1版第3刷, 224, 医学書院, 東京, 1994
- 13) 茂野香おる, 今井宏美：系統看護学講座 専門分野Ⅰ基礎看護学技術Ⅰ. 第16版第4刷, 医学書院, 東京, 2018
- 14) 有馬明恵：内容分析の方法. 初版第6刷, 1~29, ナカニシヤ出版, 京都, 2017
- 15) 小沢久美子, 木立るり子, 五十嵐世津子, 他：看護学生におけるSNS利用とITリテラシー教育および道徳的感受性との関連. 日本看護研究学会雑誌, 41-1: 37~46, 2018
- 16) 小玉有子, 齋藤三千政, 戸来睦雄：学生の感情を表す語彙と情動スキルの変化. 弘前医療福祉大学紀要, 7-1: 25~32, 2016
- 17) 茂野香おる, 今井宏美：系統看護学講座 専門分野Ⅰ基礎看護学技術Ⅰ. 第16版第4刷, 23, 医学書院, 東京, 2018
- 18) 大畑裕嗣：身体イメージ, 相互行為, ソーシャルメディア. 明治大学心理社会学研究, 12, 1~16, 2016
- 19) 岡澤慎一：超重症児への教育的対応に関する研究動向. 特殊教育学研究, 50-2: 205~214, 2012